

これからの体育ならびに、体育教師のあり方についての一考察 —A study of the future physical education and P.E.teachers.—

1K03B044-8

氏名 貝瀬宏和

指導教員 主査 福永哲夫 先生 副査 吉永武 先生

【研究の動機及び目的】

今日、学校教育の現場においては、体育科・保健体育科（以下、体育と略す）の存在意義に疑問の声があがっている。総合型スポーツクラブの普及の兆し、体育の授業時数の削減、座学における学力向上の重視などからもそのことが垣間見れる。自ら教育実習を経験し、実際に教師側から学校を見ても、体育が他教科よりも軽視されていることが強く感じられた。

入学試験において、運動の実技を課す大学は、体育系の大学あるいは体育系の学部しかない。高校全入時代を経て大学全入時代といわれる昨今、高学歴絶対思想は薄れたかもしれない。しかし、その中でもより環境・設備・名声の良い大学に行こうとする流れは消えていないように思われる。それはやはり、戦後の高度経済成長を経て、今を我慢し良いとされる大学に進学することで、より安定した将来が視野に入ってくるということを考えが多少なりとも残っているからではないだろうか。さらに、国際化の煽りを受けて、義務教育期間の終了とともに海外へというケースも少なくないと思う。それは高校終了時にもいえる。

このような状況では、座学重視の傾向は回避できないことなのかもしれない。しかし、それでも尚、体育が教育の現場に位置づけられている理由は何なのかということに興味を持つ。自然科学が発達した現在において、あの薄っぺらにシェイプアップされた保健の教科書は何を生徒たちに何を伝えるべくしてあるものなのか。そこに体育の社会への必要性が暗に語られていると思う。そして事実、体育の必要性は曖昧で抽象的なながらも、世間一般に感じられていることだと思う。そしてよりそれを具体的に感じ、研究している先人の方々によって体育の必要性が説かれている。こういった要素が合わさる中で、体育が存続していると思う。

それでは、なぜ体育不要の声が消えないのか。スポーツライターの玉木（2001、p. 221）は、「スポーツとは自発的に楽しむものである。それは子供たちの権利でこそあれ、義務ではないはずだ。」と述べている。確かにと思う。さらに玉木は、「スポーツを義務にしたとたん、スポーツ本来の意義が（教育的意義も）消えうせる。」と続けている。また、正木は、学校体育を学ばなければならなかった理由を強い兵士の育成と述べている。そして、そこからの流れ

により、今日でも学校体育が行われているのはなぜなのかと、果たして必要なのかということについてまとめている。

それは、これまで続けられてきた軍事教練の影を残す学校体育が、現在の社会のニーズに応えることができなければ、やはり学校体育は不要なものではないのかというように感じられる。では、現代のニーズを満たすには今日の体育はどうあるべきなのか。単純にこれまでのようにスポーツは子どもたちの人格形成に役立つものというふれこみで行い、学校体育の教員が自分の職を失わないために体育不要論に立ち向かうといったことでは限界が近づいていると思う。

体育が学校に残るためには、さらなる存在根拠を示し、発展していく時期にあると思う。そのためには、これまでの学校体育を見直し、体育教師のあり方を見直し、教育の主体である現代の子どもたちのあり方を考えたときに、次へのステップが導きえるのではないかなと思う。

そこで本研究では、不要論まで飛び出し、その存在意義さえ問われている体育ではあるが、学校教育の中にはやはり必要なものではないかということについて検討していくことにする。

【各章の概要】

【第1章】では、スポーツと体育の違いを明確にする。その後、これまでの体育が十分にその役割を果たしてきていたか学校体育を見直しながら、今日でも学校体育が行われているのはなぜなのか、果たして必要なのかということを検討する。

【第2章】では、現代社会の変化の中で、教育の主体である子どもたちにどういった変化が起こっているのかということを検討し、その変化に適した教育について検討していく。

【第3章】では、現代社会において体育の役割を果たしえる、理想の体育教師についての検討を行う。体育が学校に残るためには、さらなる存在根拠を示し、発展していく時期にある。体育教師のあり方を見直し、実際に体育教師に求められるもの、これからの体育教師のあり方について検討する。